

心
經
抄

心經抄

正眼國師

摩訶般若波羅蜜多心經とは、天竺の言なり。唐にては摩訶を大と云ふなり、般若を智慧と云ひ、波羅蜜を到彼岸と云ふ。經とは自心なりと知るべし。夫れ是は釈迦、だるま達磨の作でもなく、千仏万祖の作でもなく、人々本来明かなる心なり。始なきが故に終あることなく、草木国土、十方世界、常住一相の心にして、終に迷ひも悟りもせぬ物なり。然れば常住なものかと云へば、常住と見れば、即ち常見になる。無き物かと云へば無の見になる。仏かと云へば仏見になり、一切衆生が其の儘この本心かと云へば、衆生見になる。それならばどのやうに心得べきと云ふ

に、どのやうになりとも心得やうがあれば、こしらへ物になる。一切ありとあらゆる言説、名相、思惟、*分別を着れば、一物になる。爰こゝに於て、古代も、今時も、此の法に志ある人、大に誤を取ることなり。一切言説を離れ、有無にあらざ、声色にあらざ、名も無く、相もなきなり、手も付られず、思惟も及ばぬ物なり。おぼえず一物ひるがへるに依て、仏一代の間、無心の、無念の、無相の、無作むさの、無為のとて、色々の分別をやるが為めに、無の字を説き玉ふ。此の如く兔も角も云ふべきやうはないに依て、心と名づけたるなり。若し昔より心と云ふ字なくんば、何とも云ふべきやうはあるまじきなり。人々只心と云ふ名を覚えて、其の名にだまされて、心じや〜とおぼえて、ひたすら心を明めんと思ふたりや、心のそこねぬやうにせんと思ふたりや、色々に分別して分別すれば、分別するほど分別じやになる。心と云ひ、道と云ひ、空の、菩提の、涅槃の、般若の、智慧のと云ふは、みなよき名字を付け、ほめて云ひたるものぞとしりたらば、手が離るべきなり。それならば又一切の文字はないか、何ともかとも、思はれも言はれもせぬものじやと、立ちまはりて分別せんことの是非なきに、經の中に念頃に説き玉へり。此の如く何もなき所を、ほめやうに事をかいて、摩訶と云ひ出したぞ。必ずしも大き

なる心があると思ふたらば、生死流轉の根をかたむることなり。誠に万法は皆一心のへんさ變作なるが故に、大と云ふなり。直に脇見わきみをせず、頭をふらず、爰をとつくと*親切にしたらば、只この大の一字でも、仏の本懷をば知り盡くすことなり。それでも合點しにくきに依て、同じ事を又名をかへて般若と言ひ出した。般若の智慧と云ふも、右摩訶の義理も、毛髮も別ちてはなけれども、具つぶさに知らせんために、智慧のことを説れた。多くの人が智慧と云へば、何とやらんよい物のやうに覚えて、光り輝くやうに思ふ、左ではない。智慧は人々の自在なる徳を譽めたる名なり。或は智慧とは、体と用(二)とを分ちて云ふことあれども、そのやうに細に分別すれば、仏法の物しりになつて自分の眼をつぶす。其の人々自在なる徳とは、先づ見聞の上で云へば、内に見ることゝもおもふものがあつて、それが見たり聞きたりするではなけれども、眼の縁、耳の縁で、黒を白きに見誤りもせず、鳥の声を太鼓の声とも間違ひもなく、あつさ、ひだるさ、立居に付ても、一切一々、心をくばらずして、妙不思議に明かなるを、これを本然明かなる智慧と云ふなり。此の智慧と云ふは、吾も人も、仏も*祖師も、畜生も禽獸も増すすこともなく、減ずることもなく、同じことなり。只明かに知てわきまへたると、わきまへざるとの

違ひ計ばかりなり。法華にも、心と仏と衆生、是の三つ差別なしと説けり。その余の文字を知り、經論を覚え、詩を作り歌をよみ、世間のことに賢く利根なるは、たとへば金銀澤山に持ちたると、持たぬとの違ひの如くにして、人に差ひはそつともなし。澤山に物を知つたが、うらやましくもなく、知らぬが、*氣の毒でもない。然るに此の智慧と云ふに於て、正ともなり、邪ともなり、仏にも衆生にも、畜生にも何なりとも、己が分別次第になるなり。その十界^(三)のわかれあることは、たとえば、明かなる鏡の如く、見よき顔をうつし、醜き面をうつし、黒白長短方円、何にてもありとあらゆる物をうつすに、移し来るか如くに、微塵もたがはず彰はる。然れども鏡の方より、よき影をとめて置きもせず、見苦しき物をきらふと云ふこともなく、夫々に品をたがへぬは、是れ鏡の明かなる徳なり。人の心の徳も是れに似たり。然れども人の心はよきこと到来すれば、実にあることゝ取付き、悪しきことをば殊の外にくみ、是れよりして貪欲の、*瞋しんに恚の、愚痴のと云ふ物、根も体もなくしてそだて行く、故に十界のわかれとなるなり。さて右の鏡の譬に付て思ひ誤ることがある。心の譬へべき様なきが故に、是非なくして鏡を譬にひくことなり。必ずしも鏡のやうな体あつて、摺り磨いて心は明かなると思ふべからず。只

私なく作為^{さい}造作なく、照す儘に照し、自在なる處を取て云ふたることなり。去るに依て、六祖の明鏡非臺^{みょうきょうひたい}（三）と云はれたるは、此のことなり。それならば、好きことを愛せぬやうに、悪しきことを嫌はぬやうに用心するかと云へば、さやうにてはなし、右の鏡のたとへの如く、親切に合點しても、以前より悪みつけ、愛しつけ、^{いか}悲りつけたくせなければ、我も覺えず、時々起るに似たれども、此の心本より^{じしやう}自性なきことを知れば、起るに似たる貪欲瞋恚、そだてもせず悪みもせず、取りもせず、捨てもせず、只親しく自ら知てくらまさねば、起るに似たる貪欲瞋恚、其の儘吾*本智、不生不滅の仏心なり。なぜと云ふに、貪欲瞋恚の性、指を付て知て見よ、其の儘なにもない、*實際真源なり。去るによつて、文殊の瞋恚之際即是實際、貪欲之際即是實際と云はれたる、是れ爰が大事の處にして、一點^{たじょう}錯ても地獄の業となり、因果*撥無の外道となることなり。貪欲瞋恚の性、其の儘實際本智じやと云へば、さらば心安いとおぼえて、うつら／＼と得て方になり、此の法に志なき者よりも悪き人になる。人々一大事とする此の一心だにおさへかゝへあるは、障りじやと云ふに、其の余の色々の悪しきことを放逸にせよと許さんか。さらばとて又瞋恚貪欲色々の悪を作り、罪とがおそろしとて、只仏力に依て、

念仏の勢ひ、誦經のはげみで、まぎらかさんとするは、犬が水中に移りたる己が影をほえるが如し。一切皆己が分別の影と知れば、守りそだてもせず、悪み退くることなく、其の影その儘、不生不滅の本地、爰で影と云ふたるは、心に移る分別なり。其の分別を其の儘不生不滅じやと云ふことは、譬へば鏡の物を移す時に、其の影が鏡の底より生じたでもなく、物の方より鏡の中へ入りたでもなく、両方の間より出たでもなく、*法爾として明かに顕はれたるに似たり。是れ不生なる證據なり。さて其の物を引くときに、其の影が鏡の中へかくれ滅したでもなく、その物に付出て滅したにもあらず、只本然として滅し、影がなくなつたに似たり、是れ不滅なること歴然なり。人の境界の見るうへ、聞くうへ、一切心に移り来れども、皆不生不滅なり。

*眼の縁、耳の縁、六根^(四)ともに物に相對する縁で、あり／＼と移るやうなれども、生じたに非ず、其の縁がされば、あり／＼となくなつたやうなれども、終に滅せぬ物なり。此の如く深く*決定^{けつじょう}したる中には、一切善悪の境界に於て、ひとり自在なることなり。然るを善きことがあると、悪しき事があるものじやと思ひ、*順逆の時に愛したり悪んだりするは、犬の影をほえるやうなることなり。是れを本来本具の大智般若を*昧^{くら}すと云ふなり。さて見聞の上、不

生不滅の本智じやと云ふに就て、多くの禪者が見聞のあるじなどと尋ね、或は見やうともせねども、何心なく見る初一念の当所が、仏じやと云ふ人もある。それをわるくうけがへば、生死の根本をかためるなり。それあるじといへば、一切自在なる處の名なり。何にもなき時は、何の氣づかひ遠慮なく、人家の主人の如くなり。然るに見聞に主人があると思ふて追ひまはるは、犬の尾をかむが如し。初一念の、第二念のと云ふはなきことなり。百千の念に到ても、只一念なり。譬へば声をひよつと聞きても、分別を離れて聞け、さてそのつぎに、今のは好い音じやと思ふも初の通り也。思ふとも思ふまいともせぬ共、好いとおもひ、悪いと思ふなり。どこまでもその如くなり。初一念の處を好い者じやと取るは、賊を認て子となすが如くなり。只念々一念にして*無念としるべし。

波羅蜜、到彼岸と云ふことは、此の道理を知らずして、うつら／＼うろたへ、生死の海を越えずして、此岸に居るやうなものなり。真に右の如く知りたるを、彼岸に到ると云ふなり。必ずしも此の心を明めて、彼岸に渡て到るやうなことがあるではない。生死を大海に譬へたるに付て、生死を解脱したる人を、彼岸に到りたと云ふなり。解脱を得ぬ人を此岸に居ると云ふな

り。然らばまづ生死と云ふことを能く知るべし。凡夫は生を悦び、死を惡む。此の身法性の大海より、浮漚ふおの如く、縁より起りたるものを、我身じやと覚えてより以来、生きて居るは好いと思ひ、縁盡きて死に臨むは惡と思ふ、おもはくが生死するまでにして、外に生死する物なきなり。一切衆生、元より生死に渡らぬ物なり。生るゝも、生るゝわきまへなければ、生るれども、生を離れて生る。しかもあとより生れたると分別し、死すれども、死のわきまへなくして死すれば、死を離れて臨終するを、死の到らぬ先きにとりこして、死を分別する故に、生死なき中に、我と生死を見出すこと、目を病む人のくうげ*空花を見出したる如くにして、実に縁起にして、無実なるものなり。凡そ此の身はなんじやと云ふ時に、ひよつと我じやとおぼえた思はくが、かたちなり。其の思はくを真に照して見れば、実に自性はなきなり。去るに依て生を分別せず、死を分別せず、元より手を払て自身自性なきことを決定したれば、誰れあつて生死に渡るべきものなし。かくの ごとく じきげ如レ是今直下に*證據したる人を到彼岸とも名を付け、解脱とも云ふなり。解脱と云つても、おびひもといたるやうなことがあるではない。自ら知て心にとりつく所なきを解脱と云ふ。譬へば、存じもよらぬ無実を人にいひかけられて、我心に氣の毒に思ふに、

心をしめくゝりもせねども、その時の思はくは、繩にてしばられたる如くなり。時にさき方より、いや其方のことではないと云へば、そのまゝ心がとける如くなり。氣の毒に思ふときに、心が黒くも、堅くも、ちひさくもならず、其のことすんだとても、白くも、ゆるくも、大きにもならぬ、結んでもない、解けたでもない。去るに依てなんにもなければ、此の事しらは、うつら／＼と生死を渡る物があるとおもひ、悪しき境界を甚だいみ、善きことを大に愛する思はくは、鉄城よりも堅し。それ故に*輪廻やむことなし。直に知て明なれば千劫万劫、無量の生死、只空花の如く、昨日の夢の如く、西へ向ふる頭を東へねぢむくよりもはやく、其の儘法身仏なり。これを解脱とも云ひ、生死即涅槃とも云ふなり。*即と云ふは、また生死と涅槃と、どことも別々のやうに覺へて居る人を引くの言なり。此の事を知らねば生死なり、直に知れば涅槃なり。譬へば西向に坐しながら、東むきに坐したと覺えて居れども、人あつてそれは西向きよと云ふとき、さらばこれが西向の方であるよと知るに、方角は少もかはらず、只ひよつと覺え違へたまでのことなり。然らば人々此のこと明めたるは、皆涅槃に到りたるかと云へば、元と涅槃と云ふ物なきなり。生死と云ふ物を見て居るによつて、只その思はくを転じ

させんとて、こちらに涅槃と云ふ言を出して、先づしばしとりかへた。生死のみさへ休したらば、あとは何にもなきなり。去りながら、涅槃とは、不生不滅と云ことなり。その段は本経にて云ふべし。

心経この心の字は、まへにも云ひたる如く、人々本然円明にして、一切の言語の道も断え、
*心行しんぎょうもつきたる處で、名の付けやうに事をかいて、心と云ひたることなり。これを明なりといへば、光あるやうに思ひ、円なりといへば、まるい物じやと覚え、空といへば、上と下とを離れ、何にもない處のやうな物じやと思ふ、どうなりともかうなりとも、目くらどぢで、云ひ次第に取付く、それ故に、どちつかずに、心と名を付けた。それでさへ、此の心の字をいつともなくに覚えて、どうやら心と云ふものあるやうな、それは爾なんじがおもはくなり。先づ此の心の字を、よく／＼唱へて見、知つて見よ。紙にあらはしたるは、墨の色で、心／＼こゝろ／＼と唱へたと云ふても、音の響き、又其の文字を一点づゝはなして見れば、ちよぼ／＼としたる筆の跡なり。去りとしては、をかしい物を覚えて居て、心じやと覚ゆるぞ。さらばそのやうに云はゞ、人の本性は、やくたいもないものかと云へば、やくたいもない物と云ふこともなきなり。どう

なりともかうなりとも思はくを付れば、* 生生世々しやうじやうせぜ、生死の根元、輪廻の大本となるぞ。況や一切善悪の境界にとりつくやうはなきなり。爰にて断見五の空見のと云て、人々をぢることなり。只かへすがえすも、見けんの字が病と知るべし。断なりと見み、空なりと見、無じやと見、さては有の、常の、仏の、衆生のと見れば、見るやうに見けんに落るなり。その一切の見がやめば、仏の大涅槃と云はれたる所なり。若し断の字、空の字、無の字が病とならば、言語道断と云ふも断見か。五蘊六皆空の、空中には無色等も空見無の見か、仏は第一番に空見に落ちたるものならん。故によきことでも、あしきことでも、一切のことに於て、見の字が病、生死の大種と知るべし。能く知つた人は、何と見ても見けんはなきなり。去るに依て、楞嚴七でも、見をみる時、見けん是れ見けんにあらず。見けんのやうに見ても猶ほ見けんの当体、元より離れ、此處に於て、見と云ふ名を付け處なに依て、見も及ぶこと能はずと云ひたることなり。是に付て真見の妄見のと云ふことを論ずれども、みな妄想の皮なり。

經の字は常なり法なりと云ふ心で、人々古へより* 未来際さいを盡くして、曾て曾生死変滅にあづからず、常住の仏性、此の仏性、元より無性なる故に、釈迦でも達磨でもつくすこともなら

ず、本然として無自性なるを、涅槃經でも、常住仏性と説かれた。是れ此の經の字のことなり。法とは一切衆生の心法、是れも言のかはり、品の少し替つたばかりで同じことなり。手を払て無性なる故に、山を見れば山を*さへず、川を見ても川をさへず、草木国土、万法一切なんでもかでも、移るまゝにして明かなるを法と云ふ。この心の外、法もなきと云ふも、此のことなり。如し是知りたるを經と云ふなり。されば經と云ふことは、文字が經でもなく、言句が經でもなく、只此の心に通じたるが如来の經なり。古人の桃の花(ハ)を見て悟りたるは、眼が經となり、竹に瓦(瓦)をはきあてゝ悟りたるは、耳が經となり、彼の楞嚴の*二十五円通を見よ、皆悟入の縁別々なるが如く、見てなりとも、聞きてなりとも、坐禅してなりとも、行してなりとも、臥してなりとも、大小便の中に至るまで、此のこと親切にして、直に自らの手の内を見るやうに通ずれば、通じたる所が汝の經なり。されば一切の經、何の經にてもあれよ、仏の此の經と云はれたる言句は、皆汝人々本具の仏性を指して云はれたることなり。と云へば、心さへ好ければ經はいらぬと云ふて、そまつにする人がある。森羅万像悉皆此經じやと云ふものか、そでないこと云ふことはなきなり。今仏の經卷は、仏在世の法要、甚深の説なれば貴むべきなり。

必ずしも重荷にすることではなきなり。先づ大かた経と云ふものは、此のやうに合点したらば、仕損じは有るまじきなり。若し具さに経のことを云はゞ、書きつくしたと云つてもつくせぬことなり。此摩訶般若波羅蜜多心経と云ふ題号に付て、さまざまのことあれども、それは知てもいらぬことなり。おほかた右の心を合点すれば此の経は知つた道を行くやうなるぞ。此の経は何を説かれたと云ふに、般若の道理を説かれたる物ぞとをぼゆれば、いつのまにやら、般若と云ふ言にそらされて、余所のことのやうに覚ゆるぞ。只心経じやと云ふからは、只自らの心を鏡に顯はしたとみるべし。此の経計りでもなく一切の経論みな其の通りなり。

觀自在菩薩。

自らのことなり。自らならば、なぜ觀自在ぞと云ふ中に眼を開けば、山河草木、青黄赤白黒、大小方円きらりと顯はれ、耳に通ずること千万の音、六根皆その如く、千万のこと一度に對して、一つも見ぬことなく、聞かぬことなく、この心の自在なること、何に譬ふべき物がなきなり。去るに依て華嚴經の中にやらん、十鏡の譬を以て説てであると覺えた。其の譬は、鏡を十方

に掛る、一鏡の中に九つの鏡が見え、一々の鏡の中を見れば、百千の鏡が見ゆる物なり。然れども少しも鏡がさへることもなく、せまくも廣くもならぬ。其の如く、人の心に一切千寓のことが移り来れども、心に多いと思ふこともなく、目に見る中に声を聞き、舌に味ひ、身のあつさ、さむさと云ひ、一度に覚ゆれども、目に見やむを待て、耳より入る声を心に通ずると云ふこともなく、少しもたがひも、さへることなきなり。是れ観ずることの自在なるゆゑに、人を指して観自在菩薩と云ふなり。観はみると云ふ字なれば、眼のこと計ほかりのやうなれども、一を擧げて六根を皆同じことじやと云ふことを知らせるなり。菩薩と云へば、吾しらずに外の事のやう覚ゆるなり。菩薩は、慈悲第一とするなり。慈悲と云ふは、如何やうなることぞと云ふ中に、さてもあはれや、かなしやと云ふは、慈悲でもない。去るによつて多くの人が慈悲と云ふ物を拵こしらえんとする、それは愛見の大慈と云ひて、愛着に落ちたることなり。人々ほんどく*本徳にて拵へ起すことを用ひずして、仏と衆生と元より毛髪を隔てぬ故に、非道に犯しなやますべき衆生は、独りもなきなり。只本然として一切をさばくを大悲の光と云ふ。此の大悲のことに付て、色々

のことあれども、今、云ひつくされず。慥に自身観自在菩薩と知るべし。是れより已下いかの文句は、自心のことを移し出して見ると思ふべし。鏡に我面を移して見るが如し。

行深般若波羅蜜多時。

行ずると云つて、こしらへて行ずると云ふことにはあらず、日用動作の上が、般若を行じて居ることを知るべし。然るに立つも般若、居るも般若、見聞一切が般若じやと云へばとて、ひとこと／＼に、般若を付てはなきなり。夫では般若と云ふ物が一つ出来るなり。只立つは立つなり、居るは居るなり、一切般若観自在ぞとならば、貪欲瞋恚、一切の悪をなすも、皆般若の智慧の働かと云ふ中に、いかにも外の物にてはなけれども、よく／＼思惟觀察して見よ、自らの心と云ふ物を、どこともなうよき物じやと覚えて、自心で自心に着する故に、其の時の名を我といふなり。我といふもの、当体只汝が思はくのみにして、何にもなければ、ある物のやうに思ふ故に、我に相應のことをば貪り、我に違ふ時には瞋り、色々の相が頭はる、それは只畢竟自心を知らで居る。一念に隔てられて居る故に、是れを知らで居る時の名をば愚痴と云ふ

なり。愚痴も汝が自心、智慧も汝が自心、独^{ひと}狂言をするやうなる物にして、其の時の善心が判官になつて出るかと思へば、又その時の悪心が、弁慶になつて出るなり。仏より畜生に至るまで、一つも一心の幻作にあらぬ物はなきなり。その自心本来より、今日ありくとして、現在するに至ても、何をか指して自心じや智慧じやとかたどり、名をつくべき處のなきことをしりたらば、貪欲とも、瞋恚とも、大悲とも、仏とも心とも名の付けやうのなきなり。爰をとつくと知りて、瞋らば、火焰ほど瞋^{いかり}て見よ、欲が起れば、山ほど起して見よ。縦^{たど}ひ起るも自心の^{こうみょう}光明、起りたるを嫌へば、嫌ひてになり、取りそだつれば、実に瞋と云ふ物になつて、是れより色々の境界を建立して生をとるなり。善心でも、悪心でも、起らば起るまゝ、休まば休むまゝ、取でもなく、捨るでもなく、常に只自らの無自性なることをうけがひ、直に照して知れば、目を開て世界を見る如く、山もあり、川もあり、人もあり、畜生もあり、浄き物もあり、穢しき物もあり。さまざまあれども、皆是れ汝が眼より出る大光明にして、嫌ふこともなく、取ることもなきが如く、取りも捨てもせねば、起つた瞋恚が、汝が*神通光明なり。この事を能く真実に合点すれば、百千万のことに通じて、少しも心に煩ふことなきなり。是れを般若菩薩と名

づくるなり。時と云て、般若の智慧を行ずる時分があると云ふてなきなり。如是のことを自ら親しく知りたる其の時なり。この事を知て、一切二六時中さはりなければ、いつもこの時で居るなり。心の外に別の時がなきなり。無始より以来、* 盡じん未み来らい際さい、只此の一念一心一時なり。

照見五蘊皆空度一切苦危。

五蘊とは、色と受と想と行と識となり。蘊はつゝむと読む字なり。この身の五蘊あつめつゝんであるを云ふなり。色と云ふは、色身。受と云ふは、六根に色聲香味觸法を受るなり。想と云ふは、心に何やかやのことを思ふなり。行とは、昨日の身は今日に移り、今日の身は明日に移り、若きより老に至る、此の移り更る處、手足の働く處を行と云ふ。右のこと一々に知るは識なり。此の識が六根ともにつかさどる故に、此の識を本心じやと取付く人が多い。その人は賊を認て子となすと叱つておいたも此のことなり。右五蘊は、皆空じやといへば、此の身がある物じやと思ふに依て、それよりして生を悦び死を悲む。此の身は、しばらく父母和合の縁よりおこりたる物故に、縁起は元と自性なきものなり。譬へば燈火の如く、燈心と油と瓦(土)と

の縁で、あり／＼ともえて、有りの儘でなきものなり。人の身も其の如くなり。この身を一々に、*地水火風に返し終て、後に空じやと云ふは、有相の目に掛る人のために云ひたることなり。返すに及ばず、今其の儘で返し終りたるものなり。受想行識すべともに都て只汝が縁起にして実なきことを知らず、一念で色が実に目に対したと思ひ、声が実に耳に入つたと思ふ、六根共にその如く思ひ、その思ひともに縁より思はくがあるやうなと云ふことを知らず、実に移り行くと思ひ、若きより老に至りたと思ふ、悉く皆汝が分別なり。分別なきに身が方より自身と名乗はせぬなり。一切方法が皆その如くなり。識と云ふは、意にしる處の物なり。この識のしるも、只縁に対するときしるに似たれども、鏡の中の影の如く、識じやと思ふおもはくより外に、微塵ばかりもなき物を、多くの人が是が実にあるものじやと思ふ故に、其のおもはくが、どこともなう一物となり、それよりして、人となり、天となり、色々十界(十)の境界に渡て、車の輪だちをめぐるが如く、生を引き形を取てやむことなし。一切の諸物、歴代の祖師共に一切衆生の生死*往来することの不便さに、この自心本来清浄円明にして、生も死もなく、五蘊皆空と示し玉ふも、この生死往来を休めんためなり。右の如く自心元より何もなく、譬をよせて云

はば虚空の如し。爰をとつくと知つたる時には、五蘊の上、其の儘に空じやと思ふ計りで居ると云ふではない。其の空じやと解する分別もなき時を、強て名けて虚空と名を付けたることなり。此の如く知つたる時は、生れて来た過去もなく、再び生を得べき未来もなく、生死共になければ活て居る現在もなきことなり。此の人には因果もなく、因果を撥無すると云ふこともなく、三世已になければ一心と云ふこともなく、仏でもなく、衆生でもなく、何でもなし、況や名と相とがあらうやうがなきなり。なんにもないによつて、是れ爰を仏とも名を付て、空とも清浄とも、道とも、円明とも云ひたることなり。然れども右のこと慥に親切にきめずして、一点の*法見でも微塵ばかりもあれば、その見即ち我と云ふものになつて、生を引かねばおかぬなり。初め云ふ如く、明かなる手前で見た時には、一切衆生の輪廻、夢の如く、生死も夢の生死、瞋る人を見るに夢で瞋り、欲の人を見るに夢で貪り、畜生、餓鬼、人天、*仏果までが夢の畜生、夢の餓鬼、夢の人天、夢の仏、千万億無量*恒河沙こうがしやの形を得来る衆生も、皆空華くうげ（十二）往来にして、生も空華、死も空華なり。是れを慥に知つたる時は、日用一切たがの上で空華をしり、夢としつて取りもせず捨てもせず、吾にたがふたるは、夢の差たがひとしり、順じたること

は、夢の順なりと知て、差ふことを憎まず。順じたるを愛せず、憎むまい、愛すまいと云ふ用心もせず、金銀財宝もその如く、捨てもせず欲もなく、ありの儘でさばく時には、鳥の虚空をとぶ時、空の中に鳥の足跡なきが如く、魚の水におよぎてさはりなきが如し。親をば親の如く、子をば子の如く、兄弟妻子他人知人、只それぞれの儘でたがひもせず、何の子細もなきなり。

去るに依て、道元和尚(十三)も、「水鳥の行くも歸るも跡たえてされどもみちはたがはざりけり」

と詠ぜられたる如くなり。如是現在の色身、その儘生滅なきが故に、色身の縁終はりたと云ふて、再び生を受ることもなく、色身離れたる心が空のやうになつて居ると云ふことも、居らぬと云ふことも何にもなきなり。それならば、この事さつぱり埒明きたる人の、死で心はどのやうになると云ふ人あり。今現在ありくとしたる如くの時さへ、分別を離れて、色々の思はくも離れて生滅なく、なんとなりともし方付くべきことがなき物か、色身の縁つきたる時に、なんとなるべきぞ。なんともならぬものなり。なんとなりともなれば、これ生滅と云ひ、去来こらいと云ふなり。こゝで多くの人が空見、断見と云つて、おそろしがなるなり。空じやと見、*断無じやと見れば、その見体又生死に流転するなり。其の見けん共に空なりと断絶したらば、それこそ真

の不生滅の大涅槃とは云ふなり。然れども右のこと、一々夢の去来じやとしらぬ人の手前では、うつら／＼と色身もあるもの、何もかもあるものじやと思ふは、夢を見る時に、夢とわかまへぬやうなもので、覺て見たれば、さても夢じやものと知れども、さめぬ中は、夢のうちに谷へ落ち、蛇に追れたると見て、あせをかいて苦む。その如くさめたる人は、さても十界の境界は空華じやものを、知らで境界をとることかなと思へども、生死の夢さめぬ人は、この生終つても、又生を引きひきして埒は明かぬ。後には被毛戴角^(十四)の身を受け、うつら／＼と苦をうけ、それよりして、ゆめが次第に深くなる程に、仏とも法とも、善とも悪ともしりわけもなく、生死の闇に苦むこと、さりとしては氣の毒千万なることなり。去るに依て、今日此の身の自由なる折節、一足ふみたがへても、とりかへしのならぬものなり。事々物々、順逆一切のうへは、大きなることでも、小さきことの上でも、子細に自心自性のなきことを照し、かへしがへし親切にすれば、独り生死の手が離れ、此の一段に説く處の真空が、ひしときはまるなり。去るに依て、五蘊の空なることを知る則は、一切作業なることを知る。右一々明かに照しみるを名付て、一切苦厄を度すと云ふなり。自らなやむ分別の苦を、幻夢の如く、空華の如く、一切分別の影

とすれば、ありのまゝで空なる故に、善悪のうへ其の儘照見し盡くすを、苦厄を度すと云ふなり。如し見盡くした人は、自らは謂ふに及ばず、十方世界の衆生、三世百界の群類、有情も非情も、只一時に度し了るなり。如何となれば、眼に一法を見ず、一衆生を見ず、一微塵ばかりも見ず、手を払て悉く空なりと度し了るなり。爰で何もかも空じやと思て、空見が我しらずに起るに依て、次に舍利弗を呼で、其のことを告げ給ふなり。

舍利子^(十五)。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。

舍利仏、空と云ふは、色^{しき}をけして、空じやと云ふではなきなり。一切の法色、ありとあらゆる色の体の上、さまざませずして相を見ず、故にあり／＼とありながら空なり。去るに依て、色ではなきが故に、空に異ならぬなり。とはいへども、又是れに取付て、万事を空な物じやと合点して居れば、多くの人が後には人の常の道を失ひ、父母も空なること、兄弟も空なること、上人と云ふも空なること、下人と云ふも空なること、うやまひもなく、憐もなきやうになる、

それはゑて勝手の空なり。其の故に再び空不異色と示めし給ふなり。一切空なるが故に、一微塵として、さへることがなく、空として色にあらぬことは、一つもなきなり。天は天なり地は地なり、父母兄弟、上も下もありのまゝなり、故に是れをつまびらかにしらせんとて、色卽是空。空卽是色と示し玉ふなり。人々色の体の上、直に空じやとみることは、誰れもかもなることなり。有相が目^に掛る故に、それを直に空じやと見ることは、消してみるでもなければ、覺えず空と云へば、色その儘ないぞと氣がつくなり。そこで微塵も空となりとも、有となりとも、分別して見をつくれれば、あしいぞと、いつかとりかへて押へかゝへの分別になる故に、物ごと不自由でつかへるなり。故に空卽是色と云はれたり。空にしてさはりなき故に、一法としてさまたげることがなきなり。山は山の如く、川は川の如く、人は人の如く、十界の境界、ありの儘で一つもきらふこともなく、にくむこともなく、あいすることもなく、鏡に影の移るが如く、善は善の如く、悪しきことは悪しとしり、一つも覚えちがへもなく、さはりなき時は、十方世界、一時に見開いて、色の上有りの儘なり。去るに依て、一人*真を發すれば、十方十方世界悉消殞すとあるなり。空卽色と、ひらけた眼で空の穴を推開いて、十方世界ありの儘でさまたげ

ぬことなり。爰で手が離れねば、観音の三十二相も、仏の説き玉へる身を、十方に分ちて、化身(十六)を現じて、一切衆生の願に隨て*化度けどはならぬことなり。爰は大事大切な場で、人の*根に依て、あげおろしの六敷き所なり。是でいひつくされぬことなり。まづ右一々大体此の如く知て見たれば、受想行識亦復其の如くなることなり。

舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。

舍利子と呼て、いよ／＼詳に知れ、色も空なり、空も色なり、空も色も、汝が分別すれば、意と言とのあやつりで、二つあるやうに思ひ、或は二つはない一つじやと思ふ、それはどちらでも空有の分別なり。そのどちらの分別も、共にやらんとて色不異空。空不異色のと云ふたるものなり。一切手を払て、おさへ抱へがなければ、一切諸法は、ありの儘で皆空の相とするべし。只一つでも云はんに、自らの色身が、今迄あれども空相なり、相が空じやと云ふではない、相は即ち空相じやとするべし。是れ一つで、一切目にみる色でも、耳に聞くものでも、舌に味へるものでも、山河大地も、仏も衆生も、皆是れ空相とすれば、殊の外働きやすいことなり。

とは知つても、又時々我知らずに、月日の上で愛が起り、腹が立ち、姪心が起りたるやうがあれども、直に自性のない空愛、空瞋、空姪と知れば、おさへることも、悔むこともなく、況んやそれを又とりそだてもせず、起つた*二毒が、汝が大光明なり。爰で又一足ちがひても、大事の場なり。能くよく心得べし。如是しつて見よ、一切のことが生じたことではなく、滅したこともなく、穢れたと云ふべきやうもなく、きれいなと云ふべきやうもなく、増すしもへりもせず、畢竟一つに言へば、只汝が分別の手が離れたれば、諸法が方より生じや滅じや、なんじやかじやとは云はぬ。汝が一念の*計度けいたくで、皆生滅があるやうに、淨穢増す滅があるやうなり。不生不滅のとは、前の題号の下で明かしたる如く、一切見やうと思ふ念を生ぜぬども、明に見るなり。念を生ぜぬ故に、見やむといへども滅せぬなり。むさい物も見るといへども、嫌はねば穢れもせぬ。きれいなるものを見るといへども、清淨にもならぬ。色色の物を一度にみると雖も、増すしも廣くもならぬ。芥子ほどに小さき物をみると雖も、減りもせず、六根共にその如く、諸事万般の上、その儘不生不滅なることを深く信じて、兎も角も分別で分別を追ひまはらず、念で念をおさへず、只念々の上不生なるが故に、不滅と知るべし。然れども不生不

滅と云へば、どこともなし、そのやうなる物があるやうに思はるゝ程に、よく／＼照り返し／＼不生不滅と云ふことを究むべし。一々の分別が出来たでもなく、分別やんだに似たれども、其の分別が滅じてなくなりもせず。とすれば、悪しき分別と嫌ひて、そだてもせず、善き分別を自慢もせず、悦びもせず、其の儘不生なり不滅なり、往くも生滅を離れ、還るも生滅を離れ、食をくひ、茶をのむこと、大小便の上までも生滅を離れ、鳥の虚空をかけり、雲の風に任せて、さはりなく往来するが如くにして自由自在なり。生滅を離ると云ふことは、付て物を離るゝと云ふやうなることにはあらず、生と見、滅と見、垢つきだの、きれいの、増すすの、減るのと云ふ分別の性其の儘なんにもなきを、離るゝとは云ふなり。

是故空中無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。
乃至無意識界。

前の如く己が手を見る如く、水の冷かなるを知りたるが如く、慥になりたる時は、一切皆手が離れて自在なるを、假りに空と名を付るなり。去るに依て、此の人の目に一微塵ばかりもかゝ

らぬ故に、一切空なり。此の如く空の中には、何を指して色とし、何を指して受想行識とし、色聲とし、香味觸とし、眼界とし、意識界とせん。故になし／＼と云ふなり。然るに何にもかにもなし／＼と云へば、云ひつぶして無と見るではなけれども、無の字が一番に心に浮ぶ故に、我しらず*無自性の病となるなり。去るに依て、此の處をば空中無の、受無の、想無の、行無のと云ふやうに読めば、又心も転ずるなり。色はなき儘の色なれば、色をさまたげず。なき儘の受想行識なれば、いづれを取り、何れを捨つべきともなく、一切ありとあらゆることを、仏でも衆生でも、皆なき儘の一切諸法、なき儘の仏、なき儘の衆生としれば、自ら我も無の我なり、人も無の人なり、これを仏眼と云ふなり。此の眼が開けねば、一切度生どしやう（十七）はならぬことなり。故に前の諸法空想といふ四字をよくよく合点して知つたらば、仏の本懐は見盡くすことなり。空と云ふも無と云ふも、字はちがへども同じ言なり。よく／＼なき儘の色、なき儘の声、なき儘の香味觸なりとするべし。乃至とは、眼界と初を顕はし、耳界と鼻界と舌界と身界を略したる言なり。五蘊、六根、六塵、六識の十八界と、一々皆あるに似たる物で只*電いなすまのやうなることなり。電のやうな物じやと云へば、はやい物かと心得べからず。あり／＼とひかれど

もなんにもなく、なんにもなければ、あり／＼とある所の譬へに云ふなり。故に臨濟和尚の三世の諸仏も、電を払ふが如くとやらんと云はれたと覺えた、是れもそのことなり。

無無明。亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。

この無明と云ふに付て、釋摩訶衍論(十)の中に、無明に六つの積をなして、龍樹菩薩のおかれたと覺えた。其の六番目に無明と云ふことを説かれた、又是れ常ていの眼でいはぬことなり。

凡そ無明と云へば、若輩の時よりわるいことじやと覺えて、無明がかたまつても有る者のやうに思ふなり。さではない。知つたとしらぬとのたがひ計ばかりで、知つた心が中よりとび出もせず、知らずに居ると云ても、知らぬ心がまつくろにかたまつてもなきなり。只自心親しく直下にうなづけば、知らなんだ心が、其の儘只汝が明かなる心なり、無明即明也。無明をひらいて明かになつたではない。只無明の当体でなんにもない故に、その名を付て、明かとは云ふなり。然れども知らぬ隔りで、天地のたがひは出来。譬へば大事のことを主君より言付られて、いつの何時と、時までさゝれて居て、若し忘れてその時刻がちがへば、死罪に及ぶ、是れ忘れたと云

ふて、忘れたる物がかたまつてあるではない。只わすれたまでなれども、害をなすこと甚し。その如く無明の体性実性なけれども、知らぬは永く空の生死に空しく流転するなり。それ爰でよき因縁で当体自心を悟るも空悟なり。此の如く一々合点したれば、無明となづくることもなく、又無明と云ふが、即ち無の無明なり。無明を蓋くすと云ふことではなく、無明とすれば、無明の当体、元より自性なければ、過去久遠より以来、つきてをるなり。よし盡くすと覺えて情出さんと、知つた目より見れば、空情を出し、空がきて空盡するなり。知つた人は無明もなく、つくすこともなく、況や明もなく、盡くさぬと云ふこともなく、老いたと云ふこともなく、死すると云ふこともなきなり。爰で人ごとに此の色体には、老の若の、生ずるの死するのと云ふことがあれども、此の心は不生不滅で、生死もなく、老若もないと覺ゆるなり。それでは我しらずに身と心と別々になる。此の身は、心の形なり。それでなければ、転廻するに思はく次第形が現ずると云ふことは立たぬなり。然るに此の色身直に生ぜず死せず、若くもなく老いもせずと云ふことを知らねばならぬ。汝が生死者若の分別なければ、独り生死を離れ、老若を離るるなり。是^{この}ぶんで慥に知たれば、埒があけども、その分では分別せぬやうを教るに似たる故に、さつぱりとなほいほどに、一々せんぎして聞かすべし。もしその母の胎の中より生じ出ると

云はゞ、母の胎内へ生れぬさきは、いづれから入りたる物であるべき、いや父母和合の時入りたりと云はゞ、いづれの方より入りたる物ぞ。もしさきの死したる者の魂が母の体へ和合の時入りたりと云はゞ、其の先の死したるは、いづれより元は起つたとさきを尋ねたる時には、根本出處がなきなり。よし根本の出所があるにして、今日の色身は、前生の色身を以て母の体内に入りたるものか、但し新しき四大を母の体へ持て入りたるものか、もし世間の地水火風を別の魂どもが体内へやどる時持てゆいて人になり、畜生になり、色々の貌にするぞならば、世間の地水火風が次第に減じて、後にはよみかへつたもの計ばかりになつて、地水火風はあるまじきぞ。死次第に元へ返すに依て、四大はへらぬと、うつけたことを云はゞ、死体を焼てみれば、なんにもなくなる。然るときは返すと云ふことも立たず、四大曾て此の身を成就し、死に及んでは、四大を一々に返し終ると云ふことは、此の身を実にある物じやと思ふ人のために云ふたことなり。元から無きに依て返すことなきをしるべし。元より不生の故に不滅なり、生じたるに似たり、死したるに似たり。死と見、生と見るは、目病む人の空華を見出したるものなり。老若のこともその通りなり。生れて皮肉も円満な時、年もよつて身のかじける時のことを分別して、なら并べて思ふに依て、若いと思ひ、年ひねたるものは、以前皮肉の円満な時のことを思ひ出すに

依て、我は老いたと思ふなり。若いと云ふは、老の分別に対して云ひ、老ひたと云ふは、若いと云ふ分別に対して云ひたることなり。皮肉の円満な時、こちらに老ひたると云ふことをよしにしては、何と云ふたものであるべきか。只円満な時は円満の時なり。皮肉かじけては、只かじけたるなり。暫くそれに似たるものなり。去るに依て此の色身の上でやはり生死もなく、老病もなきなり。病と云ふに付て、古へより多くの者が悟れば病はぬけるなりなど、いふやうなことを云ふ者折節ある、大なる誤なり。病は只病なり。色身にも色々の相あり、相にも病者もあり、無病もあり、無病も無病なり、なんでもなきなり。寒い時は衣を重ね、飢たる時は食を喰ひ、病には薬を用ひ、上たる人をば敬ひ、下たる人を憐み、只そのありの儘なり。去るに依て、生老病死の上が生老病死なく、なきが故に盡すと云ふことも、つくさぬと云ふこともなく、只汝が分別である物と見れば、有る物なり、なき物と見ればなき物なり、どちらへなりとも御分別次第なり。分別の影にある内は、生滅有無の間にくるめく、その分別直に生死流転の根本なり。

無苦集滅道。無智亦無得。

苦集滅道と云ふは是が四諦法とて、教相の上で、声聞の人の觀法に当て云ふことである。その事は今いらぬこと、総じてこの前の段より爰にあたつて、十二因縁(十九)の六度(二十)のと云ふことがあれども、みな十分いらぬことなり。一切の名目は、分別の名とすれば皆たることなり。細かに小刀細工のやうに知つても何にもならぬ。苦は皆一切苦なりと觀じ、集は一切分別して色々のことを集る故に、生死するぞと觀じ、滅は一切皆滅し盡して、道の涅槃を悟らんとする、是れは皆刻きざみ仏法で、埒明かぬこと。今般多くの禪者、隋分じきしけんしやう*直指見性の法を知るやうなれども、皆この四諦の修行におちて居るなり。故に右一々云ひたる如くよくよく合点すれば、直に根源を盡くして、只是れ本より不生なく不滅なり。なんの苦集滅道と云ふことがあるべきぞ。爰にとつくりと落着いて見れば、一切をあきらむると云ふ智も又なきなり。智もなき故に、得ることもなきなり、又得るものがなきと云ふ分別もなきなり。然れども多くの禪者、仏學の上人が、爰で誤ることがある。いかにも、*理はこの心經の如く合点しても、*事と云ふ物は、漸々に除かねばならぬ。去るに依て、楞嚴の中にも理は頓に悟ると雖も、事は漸々に除くとあると云ふ也。是れは古代より多く覚え違ひて居ることなり。先づ事と云ふものと理と云ふものと、二つに見て錯に落ちてをる。理と見るも己が分別、事と見るも己が分別なり。分別を離れ

て、*事理が方より理じや、事じやと云はぬなり。さて楞嚴の*「理雖頓悟、乗悟併消、事非頓除、因次第盡」とやらんあつた。此れは根の差別を計つていはれたることなり。*上根しょうこんの人は、直下に此経のごとく點頭したれば、修行を用ひずして、直に自性を悟りたる眼には、なんにもなく、目にかゝるものがなく、煩惱の、菩提の、仏の、衆生のと云ふことも、ありとあらゆること、のこらず合せ錯損するなり。然れども、いやそれでも地獄と云ふことがあり、さまざまのことがあり、はらもたち、欲もおこり、色々のことがあるに依てと、跡ずさりをするがさいご、いかにもその人は頓に除くことはならぬ、漸々次第につくして行くと云ひたることなり。然る間、目の付處がちがふては、此事頓に成就することならぬなり。是れに付て多くかるはづみの輩が、仏法なく、衆生もなんにもないといつて、勤めもせず、仏前等をもおろそかにし、坐禅もいらぬと云つて、打破にし、誦経もいらぬと云つて、ひょうきんなことのみにして居るやからもある。それは得手勝手の悟なり。坐禅もいらぬと云ひ、誦経もいらぬ、禮拜も用ひずならば、欲も用ひず、婬欲も用ひず、人を憎むことも人を愛することも、人のことに善惡を付けることも、何もかも用ひぬはづなり、其方は大事な、こちらはやくに立たぬと云ふのは、とつけもなきことなり。世間の上でさへ、子は父母の前に禮を厚くし、上たる人は、言葉まで

差へぬやうにす。況やその人の云ひ付ることを背かぬは、常人の道なり。その如く仏の一々其法を立ておかれてある故に、役に立つたの立たぬのと云ふ、*りかなことはなし。仏以来世に傳てこそ、次第に合点する故に、その恩を知て、禮拜供養をもし、坐禪をもし、誦經をもし、何もかも時に応じ節に任せてなすを、無作用と云ひ、無自性と云ふなり。されば坐禪と云ふものは、やくにたたぬと云ふ時に、この事埒明かぬ人は、坐して居る時に、色々出来る思はくを只知て見たがよい。それを取りもせず、捨てもせず、百千の事が競ひ出るとも多しともせず、何ともせず、自ら只知て見れば、中々自心の心得も詳になるなり。合点したるときも、坐禪して自ら知りたるがよきなり。坐禪がもしいらぬ物ならば、立つことも、行くことも、臥すこともいらぬものよ。なぜなれば、行住坐臥は四威儀とて、定りたることなり。この内いづれは、いらぬこと、いづれは、いること、云ふことはなきなり。時に臨んで座禪を叱ることもあれども、それは、坐禪したばかりが禪じやと屈習するに依て甚だ云ふこと、誦經その外一切の作す業ともに、*なる程実義にするよきなり。一切世間のことでも、仏法のことでも、皆是れ空行なれば、空行と知て我儘にせぬは、自ら我を立てぬと云ふものなり。仏法の所作をば、やくに

立てぬと云つて、妄に走れば、世間のこともそのやうにありさうなものなれども、それはいかにも身を碎きて、よきやうに実義にするは、*そがひ仏法とて、自ら仏法と世間と別々なり。

以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。

右一切事中なんの事もなく、財宝でも取ることもなく、捨ることもなく、何んでもかでも、子細もなく、ありの儘で分別なければ、何を煩惱と立ち、嫌ひもなく、何を菩提と云つて、得べきこともなく、況や一切のこともその如くなるべし。かくの如く所得なきを眞の菩提薩埵と云ふ。依般若波羅蜜と云ふなり。この時、心にかゝはりさはることなきなり。碍りなければ、恐怖のおそれなきなり。恐れなきとて六方がましき(二二)ことにはあらず。故に返す返すも菩提薩埵の、般若波羅蜜のと云ふ、色々の名に迷ふことをほかれ、みなほめたる名と心得べし。

遠離一切顛倒夢想。究竟涅槃。

一切と云ふ言を具に知るべし。世間色々のことは申すに及ばず、仏と見るも顛倒なり、衆生と見るも顛倒なり。なんでも目に掛かり、分別におつる間のことは顛倒なり。声を声とするも顛倒なり。顛倒じやとみるも顛倒なり。爰で分別の手が離れ、無所得なるべき處なり。仏もこの仏果を得んと思ふ所得の念で、往来八千返し玉ふなり。無所得の時、初めて阿耨菩提を得たと金剛経にある。顛倒と云ふも、夢のおもはくと云ふも、同事なり。一切所得顛倒分別の手が離れたらば、初めて夢がさむることなり。この時を涅槃を究境したと云ひたることなり。さて涅槃は不生不滅と云ふことなり。その事を前の題号の終りに、本経で明すべしと云ひたれども、はやこのまへで不生不滅のことを澤山に云ふたほどに、云ふにおよばぬなり。

三世諸佛依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。

右の如く自性本来此の如くなるものと知つたを、今日大涅槃をきはめ終つたと云ふなり。是れ自らのみにあらず、三世の諸仏十方の諸仏も、この大般若の大智慧仏眼を開て、阿耨多羅三藐三菩提あのかたらしんみやくさんぼだいを得たることなり。阿耨多羅三藐三菩提とは、無上正等正覚と云ふことなり。無上とは

自性本来此の如きと知つたより外に、かみかたはなきなり。正等とは、まさにひとしと云ふこととなり。何とひとしと云ふ時に、山をみれば山とひとしく、川を見れば川とひとしく、物々夫々万境の上、等しきなり。是れを平等と云ふなり。正覚もその如くなり。物々の上、一つも覚え違ひはなきなり。正覚と云へばどこともなくよいやうに聞ゆる、汝が思はくなり。然る時に、この涅槃は、この事知つた人計りばかが究境したかと云ふ時、一衆生として涅槃を出でたるはなきなり。迷も涅槃の迷、悟も涅槃の悟なり。迷いて涅槃をいはず。悟て涅槃をいらず。出入のなきことなり。何やらの経の中に、涅槃にいるの仏もなく、成仏したる仏なしと云ふことがあつたも、この事なり。迷ふたと云ふは、己が家に居ながら、忘れて余所の家に居ると思ふやうなものぞ。我家じやと知つたと云ふても、今初めて己が家に入りはせぬ、本来より本宅なり。然る故に*本覚くと云ふことを云ふなり。しからば我は本より涅槃不生不滅の所に居るといふれば、それもはや己が家を余所にした。

故知般若波羅蜜多是大神咒。是大明咒。是無上咒。是無等等咒。能除一切苦。眞實不虛。

呪陀羅尼は、唐の言葉にして、総持と云ふことなり。畢竟心の名なり。総持とは、すべてたもつと云ふことなり。自心能く知つて見よ、よきことあしきこと、長きこと短きこと、声も色もなんでもかでも對する儘に、すべて通じて、一も余ることがなきを、総持と云ふなり。この自心般若波羅蜜は、誠に大神通不思議の咒なり。大に明かなる光明遍照十方世界咒なり。是れより上のなき無上咒なり。上がなきに依て、又下と云ふこともなきなり。何にたくらぶべき物もなく、等しき物もなきを、無等々咒と云ふなり。自心の本然なる處を、色々にほめて云ひたることなり。右初めより終りまで云ひたる所を、念頃に知つてみよ、一切苦を離れ、一切眞實にして、みたくなることがなきなり。かく言へば、いつか眞実なぞと、一物が出来て持てをる所があるほどに、よく／＼照すべし。是れより末の義理を知つていらぬこと、死句になり余のことになるほどに、わざとせるさぬなり。

故説般若波羅蜜多咒。卽説咒曰。揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦菩提娑婆
呵。般若波羅蜜多心經。

右は時の物語を書付て見たれば、やくにも立たぬことなれども、彼の唐の人も云ひける糠を
なむれば、米にも折節あたるといへる如く、千に一つも心に移ることもあらばとて、書いつく
る。くどきこともあり、たらぬこともありき。是れを判にゑると云ふことにてもなく、人に見
せると云ふことにてもなく、只戲事のやうなやこと、見てのち丙丁童〔註〕につたえ給はるべし。

般若心經抄（終）

『国文東方仏教叢書』頭注

(一) 用は作用にてはたらきと云ふ義よう

(二) 十界は地獄、餓鬼、畜生、修羅、天上、人間、声聞、縁覚、菩薩、仏

(三) 明鏡非臺は支那禅宗の六祖慧能が黄梅山に在りて五祖弘忍の法を嗣ぐ偈に曰く菩

提本非樹明鏡亦非臺本来無一物何處惹塵埃(転写注|| 菩提、本、樹に非ず、明鏡

も亦、臺に非ず。本来無一物。何れの處にか塵埃じんあいを惹かん。「偈」は梵語 *gāhita*

をシナでは「偈陀」と音訳した語の略。漢語としての翻訳は「頌」。(『新潮・現

代語古語』)

(四) 六根は眼耳鼻舌身意

(五) 断見は断滅の見に執着し因果の理を撥無(転写注|| 否定し、無視)する邪見

(六) 五蘊は色受想行識

(七) 楞嚴は首楞嚴經のこと

(八) 桃の花云々は靈雲志勤禅師が桃花を見て發悟したる故事

(九) 竹に瓦を云々は香嚴智閑禪師が瓦礫を以て竹を撃ちその音にて發悟したる故事

(十) 瓦は土皿かはらけのこと

(十一) 十界は地獄等の十の境界

(十二) 空華はまぼろしのこと

(十三) 道元和尚は曹洞宗の祖永平寺の開山

(十四) 被毛戴角は牛馬の如き畜生類

(十五) 舍利子は舍利弗のこと釈迦牟尼の十大弟子の一人智慧第一と云はる

(十六) 化身仏は仏三身中の応化身の略

(十七) 一切度生は一切の衆生を濟度すること(転写注Ⅱ「濟度」は、迷える衆生を導いて、さ

とりの境界に救い渡すこと。 『広説仏教語』)

(十八) しゃくま かえんろん 釋摩訶衍論は十卷、印度龍樹菩薩造、後秦筏提摩多の譯と云ふ

(十九) 十二因縁は無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死

(二十) 六度は六波羅蜜に同じ即ち布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧

(二十一) 六方がましきは、万治寛文の頃江戸を徘徊せる男達を六方と云ひしより転じて騒々しく大袈裟なことを云ふ

『禪門法語集』頭注

〔*〕 「水鳥の云々」この歌は應無所住而生其心の心を詠みたるものにて即ち北條時頼に與へられたる中の一首なり（転写注Ⅱ「應無所住而生其心」おうむしよじゅうたしやうごしん）は『金剛般若経』、その書き下し文「まさに住する所無くして、しかもその心を生ずべし。サンスクリット原典からの翻訳は「とらわれない心をおこさなければならぬ。何ものかにとらわれた心をおこしてはならぬ。」「まながき」にひいた岩波文庫 pp. 66-67 参照。）

〔丙丁童〕火のことをいふ、即ち火に投じて焚くなり（転写注Ⅱ「丙丁」が火の意『漢辞海』、火の世話をする下僕）

転写注

（一）内の漢数字は頁。

(二) 商量 はかり考えること。禅で師家（指導者）と修行者の間で問答往復して量りあうこと。（玉城）

(三) 常住 生滅変遷しないで、恒に存在するもの。（『新潮・現代語古語』）

(四) 分別 対象を認識するはたらき。一般人の「分別」は個人的な体験や主観に基づくので、真の認識となりえず、虚妄の認識とされる。（『新潮・現代語古語』）

(五) 変作 不思議な力で現し出すこと。（『広説仏教語』）

(五) 親切 心の底からすること。（『新潮・現代語古語』）

(六) 祖師 一宗一派の開祖。禅宗では釈迦以来連綿とつづく禅宗上の師と仰ぐにあたいする傑出した禅匠をいう。（『広説仏教語』）

(六) 気の毒 恥ずかしいこと。きまりが悪いこと。（『新潮・現代語古語』）

(七) 瞋恚 自分の心に反するものを怒り恨むこと。（『新潮・現代語古語』）

(七) 自性 本来からそなわっている性質。（『新潮・現代語古語』）

(八) 本智 基本としての智。（『広説仏教語』）

- (八) 實際真源 「實際」は、存在の究極のすがた。「真源」は、究極の根源。〔『広説仏教語』〕
- (八) 撥無 否定し、無視する。〔『広説仏教語』〕
- (九) 法爾として 「爾」は、率爾ながら、完爾として、の「爾」か。「法なるものとして」
- (九) 「六根の縁」とは六根のそれぞれの対象。色・声・香・味・触・法のこと。(玉城)
- (九) 決定 確定して変わらないさま。〔『漢辞海』〕
- (九) 順逆 有利と不利。〔『漢辞海』〕
- (九) 昧す 「昧」は、「犯す」〔『漢辞海』〕。「わからなくさせる」〔『新明解漢和』〕。
- (十) 無念 無我の境地にはいつていて私心・妄念を去った状態。(『新潮・現代語古語』)
- (十二) 空花 空華に同じ。実態のないものを観念のうえに描きだすこと。〔『広説仏教語』〕
- (十一) 證據 理解して体得すること。〔『広説仏教語』〕
- (十二) 輪廻 靈魂が肉体とともに死滅しないで転々と他の肉体に移り、ちょうど車輪が回るように、永久に迷いの世界を巡ること。(『新潮・現代語古語』)

(十二) 即 即の字のもとになった「卍」は割符を意味する。別々のもののように見えても、本来は一つであることを示す。二物が互いに表裏となつて互いに離すことができないこと。『広説仏教語』

(十三) 心行 心のはたらきの及ぶ範囲。『広説仏教語』

(十四) 生々世々 生きかわり死にかわり。いつまでも。(『新潮・現代語古語』)

(十五) 未来際を盡くして 「盡未来際」は永遠の未来まで。久遠に。(『新潮・現代語古語』)

(十五) さへず 「さふ(障ふ)」は、じやまをする、さえぎる。(『三省堂全訳読解古語』)

(十五) 二十五円通 諸法実相の理に通達して融通無碍の心に安住する二十五種の方法。『広説

仏教語』

(十八) 本徳 本来固有の功德・価値・性質。『広説仏教語』

(二十) 光明 仏、菩薩の智慧を象徴するものとして用いる。迷妄の闇をやぶり、真理を表すからである。『広説仏教語』

(二十) 神通 靈妙で自由自在なさま。(『新潮・現代語古語』)

(二十一) 盡未來際 (十五) 「未來際を盡くして」参照。

(二十二) 地水火風 仏教では万物を構成する要素を地・水・火・風と考えた。この四要素を「四大」という。四大(三十六頁)参照。(『新潮・現代語古語』)

(二十三) 往来 釈迦が衆生を救うために、この世界にしばしばやって来ること。(『新潮・現代

語古語』)

(二十四) 法見 いずれか一つの法に執着して他の法をすべて非とすること。(『広説仏教語』)

(二十五) 仏果 仏道を修行して、成仏という結果を得ること。(『新潮・現代語古語』)

(二十六) 恒河沙 恒河はガンジス河のこと。ガンジス河にある砂のように多いの意。無数なることにたとえている。(『広説仏教語』)

(二十七) 断無 「断無の見」は断見のこと。「叢書」頭注(五)を参照。

(二十八) 真 あるがまま。(『広説仏教語』)

(二十九) 化度 衆生を教化し済度すること。(『新潮・現代語古語』)

(三十) 根 感覚器官(眼・耳・鼻・舌・身)。またそれによる認識能力(意)。

(三十) 三毒 人の善心を害する三種の迷い。貪欲・瞋恚・愚痴。(『新潮・現代語古語』)

(三十一) 計度 かぞえはかる。(『大漢和』)

(三十二) 無自性 それ自体がないこと。(『広説仏教語』)

(三十三) 電 『説文解字』によると、「雨」と「申」(「い」なびかり)から構成される(『漢辞解』)。

この「電」の訓を、このように読んでみた。

(三十八) 直指見性 直指は、迂遠な言語文字をも、いろいろな手段をも用いず、端的にまっすぐ、そのものを示すこと。見性は、真の自己に気がつくこと(『広説仏教語』)。

「直指人心、見性成仏」を略言したもの。

(三十八) 理、事は、左の「事理」参照。

(三十九) 事理 千差万別の現象と、唯一平等の真如(『新潮・現代語古語』)。現象世界と究極の

境地(『広説仏教語』)。

(三十九) 「叢書」には「理雖_レ頓悟、乗_レ悟併消_レ事、非_レ頓除_レ因、次第盡」とあるが、『禪門法語集』には句読も返り点もつけていない。「叢書」の句読と返り点は誤りとしてこ

れを削除した。なお『楞嚴經』の原テキストは「理則頓悟、乗悟併銷。事非頓除、因次第盡。」である（「理として則ち頓悟なり、乗と悟と並びに銷す。事として頓除するに非ず、次第に因りて盡く」）。「銷」は「消」に通じる。）

(三十九) 上根 「根」は前注(二十九)「根」参照。また「機根」(教えを聞いて修行しうる能力)『広説仏教語』を指す場合もある。それを上下にわけて、悟りの能力のすぐれたものを上根という。

(四十) りかん(利勘) 損得を計算してかかること。また、その考えの強いこと。(『新潮・現代語古語』)

(四十一) なる程実義 「なる程」は、できる限り。「実義」は、誠意。まごころ。(『新潮・現代語古語』)

(四十二) そがひ(背向ひ) 背の方を向き合わせたさま。背中合せ。(『岩波古語』)

(四十四) 本覚 本来備わっている清浄な性質。(『新潮・現代語古語』)

参考文献

〔転写底本〕

- ・鷲尾順敬編輯『国文東方仏教叢書 第2輯 講説部』（東方書院、昭和五年）

〔転写参照〕

- ・山田孝道・森大狂校訂『禅門法語集 下卷』（光融館、大正六年。〔覆刻版〕至言社、昭和四十八年）

〔一般〕

- ・玉城康四郎『日本の禅語録 第十六卷 盤珪』（講談社、昭和五十六年）
- ・中村元・紀野一義『般若心経・金剛般若経』〔ワイド版岩波文庫8〕（岩波書店、1994年）

【辞典】 一般辞典の場合は掲載あるかぎり、「仏教語の意義」なるものをとった。

・『岩波古語』 大野晋他編『岩波古語辞典』（岩波書店、1979年）

・『漢辞海』 佐藤晋・濱口富士雄編『全訳漢辞海』（三省堂、2006年）

・『広説仏教語』 中村元『広説仏教語大辞典』（東京書籍、平成十三年）

・『三省堂全訳読解古語』 鈴木一雄編（代表）『三省堂全訳読解古語辞典 第二版』（三省堂、

二〇〇四年）

・『新潮・現代語古語』 山田俊男他編『新装改訂 新潮国語辞典——現代語・古語——』（新潮社、

昭和六二年）

・『新明解漢和』 長澤規矩也他編『新明解漢和辞典——第四版』（三省堂、一九九〇年）

・『大漢和』 諸橋轍次『大漢和辞典 修訂版』（大修館書店、昭和六十年）

〔附〕

読誦用かな付き

摩訶般若波羅蜜多心經

句点（。）は中村元・紀野一義によった。漢字は現行の字体。なお、これから「般若心経」を暗誦できるようにしたい読者のために、覚えやすくなるような改行を試みた。

ま かはんにははらみたしんぎよう

摩訶般若波羅蜜多心經

かんじーざいぼーきつ ぎようじんはんにはやーはーらーみーたーじー しょうけんごーうんかいこう

觀自在菩薩。 行深般若波羅蜜多時。 照見五蘊皆空。

どーいつさいくーやく しゃーりーしー しきふーいーくう ふうふーいーしき しきそくぜーくう ふう

度一切苦厄。 舍利子。 色不異空。 空不異色。 色即是空。 空

そくぜーしき じめそうぎようしきやくぶーによーぜー

即是色。 受想行識亦復如是。

しゃーりーしー ぜーしよーほうくうそう ふーしょうふーめつ ふーくーふーじようふーぞうふーげん ぜー

舍利子。 是諸法空相。 不生不滅。 不垢不淨不增不減。 是

こーくうちゆうむーしき むーじめそうぎようしき むーげんにーびーぜつしんに

故空中無色。 無受想行識。 無眼耳鼻舌身意。

むーしきしようこうみーそくほう むーげんかいな しむーいーしきかい

無色声香味触法。 無眼界乃至無意識界。

むーむーみよう やくむーむーみようじん ない しむーろうしー やくむーろうしーじん

無無明。亦無無明尽。乃至無老死。亦無老死尽。

むーくーしゅうめつどう むーちーやくむーとく いーむーしよーとくこー

無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。

ぼーだいさつた えーほんにやーはーらーみーたーこー しんむーけいげー むーけいげーこー むー

菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無

うーくーふー おんりーいつさいてんどうむーそう くーきようねーはん

有恐怖。遠離一切顛倒夢想。究竟涅槃。

さんぜーしよーぶつ えーほんにやーはーらーみーたーこー

三世諸佛。依般若波羅蜜多故。

とくあーのくたーらーさんみやくさんぼーだい こーちーほんにやーはーらーみーたー

得阿耨多羅三藐三菩提。故知般若波羅蜜多。

ぜーだいじんしゆー ゼーだいみようしゆー ゼーむーじようしゆー ゼーむーとうどうしゆー

是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無等等呪。

のうじよいつさいくー しんじつふーにーにー

能除一切苦。 真実 不虛故。

せつはんにはーはーらーみーたーしゅー そくせつしゅーわつ

説般若波羅蜜多呪。 即説呪曰。

ぎやーていぎやーてい はーらーぎやーてい はーらーそうぎやーてい ぼーじーそわかー

揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提薩婆訶

はんにはーはーらーみーたーしんぎよう

般若波羅蜜多心經

盤珪永琢 心經抄 (『転写版』)

平成二十三年十二月十日発行 転写者 にし・こうせい 発行所 関西人文科学出版会

〒569-0081 大阪府高槻市宮野町3の1の108 TEL/FAX 072-671-9101

E-mail: akbbs500@tcn.zaq.ne.jp

ISBN978-4-903933-01-6